（二）荆芥　防风

【单味功用】

荆芥味辛，性温。入肺、肝经。生用发汗祛风解表，治感冒风寒，发热恶寒、无汗、头痛、身痛等症，又能透发麻疹，治麻疹透发不畅诸症。炒用则入血分，可止血祛风，治衄血、便血、崩漏等症。另外，本品还可用于治疗疮疡初起而有表证者。

荊芥の味は辛、性質は温である。肺、肝経に入る。生にて用いれば発汗祛風解表によって風寒による感冒、発熱悪寒、無汗、頭痛、身痛などの症状を治し、またよく麻疹を透発し、麻疹透発不暢の諸証を治す。炒めて用いれば血分に入り、止血祛風ができ、衄血、便血、崩漏などの症状を治す。その他さらに癰瘍の初期にて表証のあるものの治療に用いることが出来る。

防风味辛、甘，性微温。入膀胱、肝、脾经。本品浮而升，为祛风圣药。既可治风寒之感冒，发热恶寒、头痛、身痛诸症，又可治风热之感冒，发热恶寒、目赤、咽痛等症，还能祛风湿而止痛，治风湿痹痛等症。防风炒用，也有止血之功，可用于治疗便血、崩漏等症。

防風の味は辛甘、性質は微温である。膀胱、肝、脾経に入る。浮性にして昇性があるので祛風の聖薬となる。一方では風寒の感冒、発熱悪寒、頭痛、身痛諸証を、一方では風熱の感冒、発熱悪寒、目赤、咽痛などの症状を治し、さらに祛風湿の止痛ができ、風湿痺痛などの症状を治す。

【伍用功能】

荆芥芳香而散，气味轻扬，性温而不燥，以辛为用，以散为功，偏于发散上焦风寒，炒黑入药，又入于血分，可发散血分郁热。防风气味俱升，性温而润（昔谓：“风药之润剂”），善走上焦，以治上焦之风邪，又能走气分，偏于祛周身之风，且能胜湿（凡风药皆能胜湿）。二药伍用，相辅相成，并走于上，发散风寒，祛风胜湿之力增强。

荊芥には香りがあり散発に作用し、気味は軽揚にして性質は温にして乾かさない。辛みが作用と働き、発散が効果となる。発散は上焦の風寒に偏り、黒く炒って薬に入れれば、また血分に入り血分の鬱熱を発散できる。防風の気味は供に昇性で性質は温にして潤（昔、「風薬の潤剤」と言った）、よく上焦を走り上焦の風邪を治し、さらによく気分も走り、周身の風を祛るのに長け、かつよく湿を勝っている（およそ風薬は皆よく湿を勝る）。二薬の配合は相互に助け上に併走し風寒を発散し祛風勝湿の力を増強する。

【主治】

1. 四时感冒，发热恶寒，无汗，鼻塞，声重，头、身疼痛等症；

2. 风疹（类似荨麻疹），皮肤瘙痒症；

3. 疮疡初起，兼见表证者；

施今墨薬対

4. 便血，月经过多，泄泻，痢疾。

【常用量】

荆芥 6～10 克。

防风 6～10 克。

【经验】

荆芥、防风伍用，名曰荆防散。《本草求真》说“荆芥……不似防风气不轻扬，驱风之必入人骨肉也，是以宣散风邪,用以防风之必兼用荆芥者，以其能入肌肤宣散故耳。”荆芥发汗散寒之力较强，防风祛风之功胜。二药参合，既能发散风寒，又能祛经络中之风热，故凡四时感冒，恶寒怕风，发热无汗，全身疼痛之症，均可配伍应用。施老认为，若属外感表证，用麻桂（辛温发表重剤）嫌热、嫌猛，用银翘嫌寒时，荆防（辛温发表轻剤）用之最宣。

荊芥、防風の互用は、荊防散と名付け言われている。《本草求真》では「荊芥は…防風の気軽揚せず、駆風するに必ず人骨肉に入るに似ざるなり、是を風邪を宣散するも防風の必ず荊芥を兼用を以て用いそのよく肌膚に入り宣散するが故を以てのみ。」と言っている。荊芥の発汗散寒の力は強く、防風の祛風の効果に勝る。二薬を参合し一方では発散風寒し、一方では経絡中の風熱を祛り、故に四時の感冒、悪寒怕風、発熱無汗、全身疼痛の症状に均しく配合し応用する。施今墨老先生は、もし外感表証に属するなら麻黄桂枝（辛温発表の重剤）を用いるなら、熱を嫌い、猛を嫌い、銀翹を用いるを嫌う場合の寒の時に、荊防（辛温発表の軽剤）を用いると最もよろしいと認めている。